様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４２０５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ２０８３７

研究課題名（和文）バスケットボールのルール・技術の史実的変遷と教材価値に関する研究

研究課題名（英文）A study on the development of rules and skills and teaching material values of basketball

研究代表者
中道　莉央（Nakamichi, Rio）

びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・准教授

研究者番号：３０５５０６９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　1891～1913年の国内の遊戯書におけるバスケットボールの取り扱いを分析した結果、当時は球入れと混同されて多数の子どもを同時に運動（3区画コート内に最大108名）させ、籠・竹竿・毬があれば実施できる手軽な遊戯であることがわかった。大正初期にかけ、小学校向けに様々な教材開発が行われていたことが確認できた。
　また、1892～1940年の国際ルールの変遷からタイムアウトの特徴を明らかにした結果、教育的配慮として休息確保のために導入され、これにより公平性と円滑な運営が保障されてゲームが高度化したことがわかった。バスケットボールを史実的変遷から捉え直すことで教育的価値や意義を再確認することができた。

研究成果の概要（英文）：　This study has analyzed how basketball is treated in Game book in Japan. It has been found that basketball at the time was confused with ball-toss game and multitude of students played together in the same court, but it was so handy that only basket, bamboo pole and ball are required to play. Thus, it can be confirmed that the development of teaching materials for elementary students was already conducted in the early Taisho era.
　This study has also attempted to clarify properties of time-out in terms of the transition of international rules, arguing that from an educational view point, time-out was introduced in order for students to take a rest. Thanks to time-out, fairness and smooth management of games came to be guaranteed, which leads to the advancement of basketball. We have reconfirmed the educational significance or values by considering the historical transition of rules of basketball.

研究分野：体育科教育学、スポーツ教育学、教科教育学、障がい者スポーツ、アダプテッド・スポーツ科学

キーワード：バスケットボール　歴史　変遷　ルール　技術　教材　球技　学校体育

１．研究開始当初の背景

わが国最初の学校体育に関する要目とされる 1913 年の學校體操教授要目をみると、すでに「競争ヲ主トスル遊戯」の中にバスケットボールが取り上げられており、バスケットボールは現行の学習指導要領まで一貫して学校体育で扱われる教材として配当されている。このことは、バスケットボールという運動素材が単に欧米から移入されたスポーツであることにとどまらず、国や時代を越えて体育で取り扱うべき教材としての価値や意義を有しているととらえることができる。

これまで球技の教材価値については、中川ら（2000）、長澤（2004）、星・玉村（2012）らによって報告されているが、運動素材を歴史的、文化的、社会的な視点からとらえて教材価値を明らかにしたものは管見の限り見られない。ましてや、バスケットボールを対象にしたものは見受けられない。また、学校体育で球技が行われるようになった過程や位置付けの変容を報告したものは 1970 年代から見られるようになったが（森田,1974;谷釜,1983;呉,1999）、球技の実態を歴史的、文化的、社会的な視点から述べられてはいない。

つまり、これまでの研究では体育の中核的な学習である運動技能の向上を歴史的、文化的、社会的な視点からアプローチすることはこれまでにあまり行われておらず、ルールや技術の変遷から運動課題を合理的に達成する技術発展の必然性を探り出し、それらを教材を再構成する論理としては追究されてこなかった（後藤・日高,2012）。子どもたちに文化としてのスポーツを継承・発展させていく資質や能力を身に付けさせるためには、このような視点で教材化された実技授業の構想は必要不可欠であろう。

２．研究の目的

本研究では、次の 2 つの大きな目的を掲げる。目的①として、学校体育におけるバスケットボールの教材価値を明らかにするために、バスケットボールがわが国の学校体育にどのように取り入れられ、どのような内容や方法で行われ、それらがどのように変遷して今日に至っているのかを明らかにする。学校体育におけるバスケットボールの導入された背景は 1896 年の『女子体育』で紹介されたことを端に遊戯書を中心に広まったことは、谷釜（1978）や大川ら（1991）によって指摘されている。しかしながら、当時どのような方法でゲームが行われていたのかを詳細に検討したものは少ない。そこで、1896～1913 年までの遊戯書にみられるバスケットボールのゲーム方法に着目し、その実際を明らかにすることを目的とした。

次に目的②として、文化としてのバスケットボールの楽しさを味わう実技授業の試案を提言するために、バスケットボールの文化性の根拠をルールや技術の史実的変遷に求め、まだ国内において明らかにされていないバスケットボールのルールや技術の変遷を明らかにすることとした。具体的には、作戦を考える学習を支える活動としてのタイム・アウトの可能性を検討する基礎的資料や、単に既成のルールや技術を理解・習得するのではなく、「なぜ、そのルール・技術なのか」を学習者が考えながら身につける授業を展開するための基礎的資料として、1892～1940 年頃までのタイム・アウト及びトラベリングのルール変遷に着目し、どのような性質や特徴を持っているのかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

目的①を達成するために、1896～1913 年に刊行された遊戯書の中で、手元に入手できるものを資料として収集し、目的・コート・ボール・用具・人数等のルール、挿絵等からゲーム方法の実態を検討した【調査①】。

目的②を達成するために、入手できた手元の資料に限るが、Official Basketball Rules（1905-1941）や Ashley（1941）を手がかりに、タイム・アウト【調査②】及びトラベリング【調査③】のルール変遷について分析した。

４．研究成果

【調査①】

1896 年の『女子体育』には、「毬籠遊戯」の名称で「源平両組に分ち各組に紙屑籠様の竹籠を長さ一間餘の竹竿の頭上に結び付け一大球を之に投入せんとして各自先を争う遊戯」とあり、2 つのチームが 1 球のボールを頭上の籠に投げ入れる遊戯と解釈できた。1897 年『新案遊戯法』、1898 年『小学適応遊戯軌範』、1899 年『新式遊戯法』では、「源平球入競争」等の名称で「籠一個ヅツヲ繋ギタル竿二本ト白赤ノ球各五十個許ヅツヲ要ス二体ニ分チ一ヲ源トシ一ヲ平トス」とあり、現在でいう「球入れ」の紹介に留まった。バスケットボールの様相に近い遊戯は、1901 年『近世遊戯法』の「毬籠」で見られるようになったことが明らかとなった。

主な成果は、以下①～⑤の 5 点に集約することができた。

① 明治後期から大正初期にバスケットボールが女学校のみならず小学校へと伝播していたことが確認できた。

② バスケットボール（米国スポーツ）と教育現場（目の前の子ども）の実態を鑑み、独自の運動文化を構築しようとした試行錯誤の形跡が見られた。

③ バスケットボールと球入れを混同して認識していた。
④ 当時のバスケットボールは多数の子どもを同時に運動させることが可能な遊戯であった。
⑤ 簡単な装置（籠、竹竿、毬またはフートボール)があれば実施できる手軽な遊戯であった。

井口（1906）が「学校に於いて課する遊戯は、教育的価値を有する動的遊戯ならざる可らず」と述べるように、当時の教育観や人的・物理的環境という教育基盤に、バスケットボールがその目的を達する価値を有していたと結論づけることができた。

【調査②】

ルールの改訂・増補は、バスケットボールをより魅力あるスポーツにするために繰り返し行われ、ルールの変遷と技術・戦術とが相互に、密接に影響し合いながら発達してきたことがわかった。そのなかでタイム・アウトは、ゲームスピードの急激な増加にともなうプレーヤーの身体的負担を軽減し、技術や戦術の多様化、高度化するなかにおいてチームの意思疎通の機会を与え、バスケットボールの発展に寄与してきたと言える。

主な成果は、以下①～④の 4 点に集約することができた。

① バスケットボールの創案（1891 年）から現行ルールの原型（1940 年）に至るまでのタイム・アウトの特徴は、「競技時間確保のためのタイム・アウト（1892-93～1888-99 年)」、「戦術としてのタイム・アウト（1904-05～1922-23 年)」、「タイム・アウトの恩恵とゲームの高度化（1923-24～1939-40 年)」の 3 つにまとめられた。
② 「競技時間確保のためのタイム・アウト（1892-93～1888-99 年)」では、主に負傷したプレーヤーの対応などで生じたゲームの中断時間を教育的観点から年齢に応じて設定された競技時間から除き、競技の正味時間を確保するために審判によって要求された。
③ 「戦術としてのタイム・アウト（1904-05～1922-23 年)」では、基礎的な個人技能に関するルールの整備とそれに付するチームプレーの発達にともない、プレーヤーの休息時間と作戦を確認する時間として、キャプテンやコーチによって請求されるようになった。そして、両チームの公平性の保障と円滑なゲーム運営のために、タイム・アウトの請求者、請求の時機、時間と回数を明らかにし、チーム及びプレーヤーの責務として定められた時間の厳守が求められるようになった。
④ 「タイム・アウトの恩恵とゲームの高度化（1923-24～1939-40 年)」では、タイム・アウトの標準的時間及び回数を定める必要性から「1 ゲームに 1 分間のタイム・アウトを 3 回まで」と設定された。しかしながら、タイム・アウト以外のルールの改訂・増補にともない、飛躍的にスピードアップされたゲームにおける休息時間の需要が高まり、3 回では不十分と 4 回、さらには 5 回へと増加し、現在に至った。

タイム・アウトが教育的配慮からプレーヤーの休息時間確保のために導入され、またコート内でプレーするキャプテンにもその請求権が認められていたこと、設定条件を整理したことで公平性の保障と円滑なゲーム運営によりゲームが高度化したことなどを確認することができ、ルールの史実的変遷からみたタイム・アウトは教育的価値や意義を有し、学校体育への応用可能性が示された。

【調査③】

トラベリングのルールの改正・増補が、何度も繰り返されてきたことが明らかになった。1892-93 年度は、既存のスポーツにはない新しいゲームの特徴として、「ボール保持者は、ボールをキャッチした地点に踏みとどまり、そこからパスしなければならない」と非常に厳しく適用された。しかし、実態は、「キャッチした後、止まり切れずに思わず一、二歩足を踏み出してしまう」場合も生じたので、「その場に止まろうとしているときは斟酌され、すぐにテクニカルファウルとならず手加減される」ことを付けくわえたものと考えられた。これがバスケットボール創案当初の 13 条のルールの第 3 条として制定された。

この第 3 条からはじまるトラベリングの移り変わりをみていくと、バスケットボールのゲーム特有の技能を生み出し、その発達の一助となっていることがわかった。それは、今日呼ばれている「トラベリング」の名称の変容をみても明らかであった。ネイスミスは第 3 条において、「“Player can not run with ball”（プレイヤーはボールを持って走ることはできない)」と示した。その後、この考え方は、「ボールを持ったまま走る（Running with the ball）」、「ボールを持ち運ぶ（Carrying the ball)」、「ボールを持ったまま移動する（Traveling the ball)」、「ボールを持ったまま進行する（Progressing the ball)」など、統一されることなくさまざまな名称で表現されてきた。しかし、1973 年以降は今日のように“Traveling”で表わし、意味するところは、「ボールを持ったまま進行する（Progressing the ball)」で一貫している（FIBA,2000)。このようにトラベリングの名称の変容からも、第 3 条当時の「ボールを保持したまま走る」という表現が適切ではなくなり、技術やゲームの様相が発展していることがわかった。

主な成果は、以下①～⑤の 5 点に集約することができた。

① トラベリングは、「既存のスポーツにはな

い新しい特徴」として、ネイスミスの工夫から「ボールをもって走ってはならない」と定められた禁止行為のひとつとして生み出された。

② トラベリングは、バスケットボールというゲームを成立させる絶対的前提条件であった。

③ トラベリングは、バスケットボール技能におけるパス・ピボット・ドリブル・シュートなどの基礎的ボール操作技能の形成過程と密接に関わっていた。

④ トラベリングのルールの移り変わりからみたボール操作技能の発展は、指導内容の明確化・体系化（運動の系統性）を示すものであり、史実のなかに段階的に指導すべき技能が存在することが確認できた。

⑤ したがって、トラベリングを回避するストップやピボットを学習することは、バスケットボールという「教材」を《運動文化》として総合的にとらえ、運動が有する特性や魅力に触れることにつながる。

ここまで述べてきたような研究成果を踏まえ、今後の課題として、本研究で得られた知見にもとづきながら、史実的変遷にもとづいたバスケットボールの実技授業を提言することが求められる。授業提案に際しては、新学習指導要領（2018 年改訂）では、「特別な配慮を要する子どもへの指導」についての記述が丁寧に記載され、障がいのある子どももない子どももともに同じ空間でともに運動の楽しさを味わうことを目指した「インクルーシブ体育」が求められている。これらの流れを受け、本研究でいう教材価値においても障がいの有無にかかわらず、すべての子どもがバスケットボールの価値を追求していけるような内容を構想する必要があろう。ルールの変遷に着目する授業づくりは、障がい等、特別な配慮を必要とする学習者の参加を保証するための新しいルールを創造したり、様々な違いのある学習者がともに楽しみ競い合えるようなルールづくりの学習を支えたりして、多様な学習者の全員参加を保障する学校体育を実現するための大きな可能性を秘めている。

＜参考・引用文献（掲載順）＞

中川昭・森井研児・椿原徹也（2000）女子大学生の教材としてのラグビーの価値.筑波大学体育科系紀要,23:99-109.

長澤光雄（2004）ターゲット型球技の教育的価値に関する一考察.日本体育学会大会号,55:627.

星幸敏・玉村公二彦（2012）特別支援高等部における体育の授業づくり:重度知的障害児に対する球技教材の教育的価値の検討.奈良大学紀要人文・社会科学,61(1):69-80.

森田茂男（1974）明治時代以後における遊戯教材としての球技の歴史.金沢大学教育学部紀要教育科学編,23:127-141.

谷釜了正（1983）学校「球技」の成立事情:球「戯」から球「技」への移行過程（明治40年代～大正15年）に関する一考察.日本大学紀要,12:1-11.

呉軍（1999）球技スポーツ素材の教材化に関する研究:学校体育研究同志会の実践を中心に.日本教科教育学会誌,22(2):11-20.

後藤幸弘・日高正博（2012）教材づくりについて.後藤幸弘・上原禎弘編,内容学と架橋する保健体育科教育論.晃洋書房:京都,pp.95-127.

谷釜了正（1978）「球篭遊戯」から「バスケット、ボール」へ：大正 3 年以前のバスケットボール導入過程の一考察. 日本体育大学紀要, 7:1-11.

大川信行 ・水谷秀樹・西川友之・福田明夫（1991）明治 30 年代の遊戯書にみられるバスケットボールについて：アメリカにおける女子バスケットボールの影響. 富山大学教養部紀要. 人文・社会科学篇, 24(1):115-138.

The American Sports Publishing Company（1905-1941）Official Basketball Rules. The American Sports Publishing Company：N.Y., USA.

Ashrey, W. D.（1941）The origin and Development of Basketball. Thesis, Louisiana State University & Agricultural and Mechanical College, USA：47-49.

井口あくり（1906）体育之理論及実際. 国光社,東京:pp.347-348.

FIBA（2000）THE RULES 1931-2000. Munich：Germany.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 中道莉央（2015）学校体育におけるボール運動・球技の教材に関する研究：バスケットボールのタイム・アウトの変遷に着目して. 北海道体育学研究, 50：93-102.

② 中道莉央(2015)小学校体育における「球技」の取り扱いに関する一考察：1913 年学校体操教授要目から 1949 年学習指導要領小学校体育編（試案）までを中心に.スポーツ教育学研究, 34(2):17-28.

③ 中道莉央（2015）学校体育におけるボール運動・球技の教材に関する研究：バスケットボールのトラベリングに着目して. 北海道教育大学紀要教育科学編, 65（2）：291-301.

〔学会発表〕（計 3 件）

① 中道莉央（2016）遊戯書にみられるバスケットボールのゲーム方法に関する一考察：1896 年 成瀬仁蔵の「籠球遊戯」から 1913 年 学校体操教授要目の「バスケットボール」に着目して．日本運動・スポーツ科学学会第 23 回大会.

② 中道莉央（2015）学校体育におけるボール運動・球技の教材に関する研究 ： バスケットボールのタイム・アウトと競技時間の変遷に着目して．北海道体育学会第 54 回大会.

③ 中道莉央（2015）球技の教材価値に関する一考察 ： バスケットボールを手がかりに．日本スポーツ教育学会第 34 回大会.

〔図書〕（計 2 件）

① ジェフ・ジャンセン 著，水谷豊・藤田将弘・中道莉央 訳（2017）最強をめざすチームビルディング：潜在成長力を伸ばすコーチの取り組み．大修館書店：東京,1-258.

② 鈴木直樹・梅澤秋久・宮本乙女 編,成家篤史・伊佐野龍司・中道莉央・熊谷晶子・大熊誠二・菊池孝太郎・牧野英一・小笠原誠・高橋正年・田澤久幸・中村有希・藤澤潤（2016）学び手の視点から創る中・高の保健体育授業：体育編．大学教育出版：東京,1-194.

６．研究組織

(1)研究代表者

中道　莉央（NAKAMICHI, Rio）
びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・准教授
研究者番号：３０５５０６９４